



ベストピアは
小原靖夫の個人誌です
2013年7月号
第317号

書評と推薦文の発展

この世の事、特に税法のことについてはベストピアに書く予定はしていなかったのですが、岩手県盛岡市の税理士榎山直樹先生から『今こそ本気で考える・相続税』と題する本の原稿が送られ推薦状を依頼されました。私は現役引退ではなく資格返上の肩書きを持たないものですから、畏れ多いことでお断りをするつもりで電話をしました。然し経緯を伺ってこの光栄な依頼を受けることにし以下のような推薦文を送りました。推薦文だけではベストピアの記事にはなりませんので補足しながら7月号とします。

(1) 榎山直樹著『今こそ本気で考える・相続税』 推薦文

バーナード・ショウが「もし貴方が天国をこの地上で探すならドブロブニクを訪れよ」と言ったクロアチアに旅立つ前日、榎山直樹先生から膨大な原稿が届きました。少し目を通して驚いたのは、私の旅と同時性という深い関係があると感じリュックに入れ飛行機の中で熟読しました。著者の最初の出版物『あなたの元気が日本の元気』(平成19年)が東日本大震災後も被災者の方々を勇気づけ4刷を重ねる影響力を今も発揮していますが、本著は更に円熟された著者の人柄がポジティブに且つ心暖かく、時にユーモアたっぷりの文体で書かれて相続を本気で考えさせられる本になっています。

本著は多くの点で真に時を得ており、丁寧之余すことなく優しく書かれ読者の心に深くしみ入る内容になっており且つ専門性にも優れ、精緻で網羅的な内容です。

先ず、平成27年1月1日以降の相続開始するものから「増税時代」の法律が適応される、その備えのための知識が第2章に詳しく記されています。

基礎控除額が40%引き下げられることにより、相続税の申告をしなければならない人が40%にもなる事が分かり易く解説されています。著者の長い経験から相続財産の少ない人ほどモメることも警告されており、第3章では賢い相続が具体的に提案されています。

そして高齢化社会に必須のエンディングノートを「私の人生最後の感謝の言葉」と捉えその作成を強く勧めているところです。更に、遺言書についてはモメない相続のために「付記事項」の勧めがあり「法的拘束力は有りませんが、残された人たちが向き合う死という悲しい現実を、そっとやさしく癒してくれるような、先立つ者の充足の気持ちを明るく伝える」ことを明確に記して先立つ者の使命とされています。

最後に著者自身の「自己宛の弔辞」を公にされて、榎山直樹先生の誠実な人柄を余すことなく物語っています。

本著は相続対策(心の問題)と相続税対策(お金の問題)について極めてオープンマインドで書かれています。「本当にいいと思えるものは業界の皆で共有できた方がいいに決まっている」との著者の心の広さに基づいています。

読み終わってふと出てきた榎山先生に相応しい言葉「私は人生を人生そのままに愛する。私にとって人生は、はかなく消え去る蠟燭の火ではなく、燃え盛る松明である。この松明を手に出している。この火を次の世代に手渡す前に、精一杯燃やそうと思う」(バーナード・ショウ) 本著はそのような力を与えてくれます。多くの方に喜ばれる渾身の一著です。

榎山直樹先生の前途に更なる広大深遠な道が開けますように祈ります。

自由人 小原 靖 夫

(2) 著者との関係

榎山直樹先生はオープンマインドな理念経営で全国的に有名な方で誠実なお人柄から地域社会への貢献も積極的に行っておられ、社員を大切に育て快進撃を続けている方です。

本を読む事、書く事が好きな方で加えて情報の共有を使命と考えておられ、年2回500人の方に献本をされてます。それを18年間もされているというのですから驚きです。

私は献本を受ける側の一人でしたが、何故、送って頂けるのかわからないまま引退しました。引退後も続いておりましたので、大変恐縮しておりました。

今回の依頼を受けて初めてその理由が分かった次第です。

1998年1月に、「40歳から読む相続の本・いまから自分への{弔辞}を書こう」という長い題名の本を私は出版していました。この本を書店で散見された榎山先生が絶大な評価をしてくださり、毎年弔辞を書き換えていくことによって心の整理ができたとお礼を言ってくださいました。そのことに恩義を感じて数多ある有名人をさておき私に推薦文を依頼してくださいったと言う訳です。私にとっては既にとくに過去のことで青天の霹靂でした。私の本は税法の本でありながら余計なことの多い本で、且つネーミングが良くないとよく言われました。今回の榎山直樹先生の本は推薦文に書きましたようにタイミング抜群の内容で、これから相続の開始を待つ方々にはおおいに参考になります。秋の出版を楽しみにしております。

(3) 「自分への弔辞」について

これは交流分析の中の人生脚本の書き換えに用いる手法で私は岡野義宏先生（故人）から教わったものです。私たちは幼児の頃に数少ない体験の中で、特に混乱した状態で、その混乱の中から脱出するために無理矢理に決断をします（幼児決断）この誤った決断に基づきその人特有の人生脚本を書いてしまい、それを演じて生きて行きます。脚本はうまく演じると観客が喜ぶので、人はその期待にそって名演技者になっていきます。その極端な現れが殺人・自殺になるわけです。この古い人生脚本から脱するには正常な状況で多くの情報を得て、自己をよく見て新たな脚本を作るという実習を交流分析では行います。

弔辞には日付が必要です。この日付を決めるのに勇気がいりますから、なるべく若い40代に書く事が望まれます。私の場合日付は2026年11月10日となっておりその後書き換えていません。後13年ですが、これは先月号のベストピアの平均余命の話とかなり符合します。15年前のものです、自分で直感的に決めた事です。もっとも人の命の明日が分からないことは十分承知の上です。内容は自分自身へのねぎらいの言葉、自分の生涯の足跡に対する最大の讃辞、社会に与えた素晴らしい影響力、苦しみを共にし、喜びを共にした家族への感謝、多くの親しい人々との幸せな交わりとその人たちへの感謝などをたくさん書きます。誰にも見せる必要はありません。照れたり、恥ずかしがったり、そんな大事業ができるわけがないなど思わないで堂々と書くのです。

書いた時点から逝去する日までのことは「こうなりたい」との思いが凝縮しています。出来る保障はありませんが、ほぼ自動的にこれからの人生の目標になります。

この事は古くは森 信三先生が「逆算的志向方法」となづけられ、「我々が何か一つの事柄を仕上げる際に適用すると、その妙を発揮するものであります。略ー現在まだ出来上がっていない物を仕上げる場合には、先ず完成した像を心の内に思い浮かべ、それを実現しようとするわけですが、その際その人がその事物をどれほどまで正確かつ的確に、心の中に一種の心像として思い浮かべうるかどうかということが、その人の思考作用においてはもっとも重要な作用ではないかと思うのであります。逆算的志向方法が、もっともよくその威力を発揮するのは、完成仕上がりの最終期日から逆算してみて『そうすれば、少なくとも何月の何日ごろから着手しなければならぬ』というふうに着手の期日を手繰りよせてくるその手堅さこそ、この 逆算的志向方法のもつ長所というか、むしろその威力が発揮せられるわけであります。略」（幻の講話第5巻）私の場合15年前の弔辞では、まだやり残していることがあります。心理学か宗教社会学の本を1冊書くことになっておりその準備のために旅をしたり本を読んだり研修会にでています。そろそろ書き始めなければならぬと思っています。

弔辞の大切な点は、今の自分をありのままに感謝して受け入れ、残る人生を自分が「こうありたい」と思う方向に向けることにあります。従ってエンディングノートとも少し意味合いが異なりますし、遺言ではありません。

今般の檜山先生の著作ではエンディングノートを手がかりに「自分への弔辞」更には遺言を書く方法を分かりやすく記されています。

（4）バーナード・ショウの名言

5月の長旅の疲れが取れぬ間に、大胆にも計画をした旅です。末期癌と戦っている弟が最後の力を振り絞って旅をしたドブロボニクです。形容できないほどの美しい街でした。現地の案内書にバーナード・ショウの言葉を発見し納得し、古今東西、人は青い鳥を求めて旅をするものだと分かりました。

バーナード・ショウの名言で最も有名なのは

「健全な肉体は、健全な精神に宿る」と「グラスに入っているワインを見て、『ああ、もう半分しか残っていない』と嘆くのが悲観主義者、『お、まだ半分も残っているじゃないか』と喜ぶのが楽観主義者である」でしょう。

今の日本に当てはまる名言「国家と人類にたいして、誰もが出来る最高の貢献とは子供を育てることである」

若い人への希望の言葉「人間を賢くし、人間を偉大にするものは、過去の経験ではなく、未来にたいする期待である。なぜならば、期待をもつ人間は、何歳になっても勉強するからである」

バーナード・ショウ (1856-1950),アイルランド出身の劇作家、1925年ノーベル賞文学賞受賞、始めは固辞していたが、賞金を寄付するという条件で受賞したといわれる社会主義者、マイフェアレディ (初演1956年3月ブロードウェイ) の原作はバーナード・ショウの戯曲『ピグマリオン』。彼はミュージカル化に否定的だったので存命中は上演できなかったと言われています。

(5) 同時性ということについて

楢山先生は『今こそ本気で考える・相続税』を「人生の最終章である人生の終わりをいかにするかという視点で書きました」とメールをくださいました。

現役を引退した者の多くの方は「いかに死するか」を考えれば生きざるを得ません。私もそれを考える時間が欲しくて完全引退をした者です。その折、弟が末期膵臓癌となり、闘病しつつ画家モネを研究し新しい視点でモネの絵画を解説した「モネノート」(人は360°花の綺麗に囲まれるべし)を書き上げたり、末期ガン患者の心理を鋭く描いた闘病記録を書き自分の天国像を想像しています。彼が手術後最後に行きたいと行ったのがドブろブニクで力を振り絞って息子と共に行ってきました。その話を聞いて私も弟が元気な間に共通の話題を求めてパリ近郊のジベルニーのモネの庭、そして今回のクロアチアの旅を実行しました。私たちは『主の祈り』を共通にしています。「天にまします我らの父よ、願わくば、み名をあがめさせたまえ。御国を来らせたまえ。み心の天になるごとく、地にもなさせたまえ—————」天国とは神の支配の完成するところですが、そこは信仰と想像の世界であり、各々が想像をめぐらしつつ天国に招かれることを望んでいます。

弟の生き方を見て、彼の天国像がかなり明確になっていくのが分かり、自分はまだまだ死を直視していないことを教えられています。「モネノート」は弟のそのような心境で書かれていますのでなんとか完成をしてもらいたいと願っているところです。

そんな私の日常に楢山先生からの依頼が入り、思いがけない同時性に驚いた次第です。

(6) エンディング・ノートについて

最近分かった事です。日本のエンディング・ノートのルーツは永井荷風『断腸亭日乗』、正岡子規『飯待つ間』にあるとのこと。二人とも墓石建立をこのまずのようでしたが、願いはかなわず立派なお墓があるとのこと。私が最初に学んだのは1986年、ア

ルフォンス・デーケン先生からでした。先生とは一昨年ドイツに共に旅をさせて頂きましたがユーモアのある方です。「死への準備教育の15の目標」の中の10番目に、「葬儀の積極的かつ重要な役割について理解を深め、自身の葬儀の方法を選択して準備する」とあります。第11番目の目標は「時間の貴重さを発見し、人間の創造的次元を刺激し、価値観の見直しと再評価を促すこと」第12番目は「死の芸術を積極的に習得させ、第三の人生を豊かなものとする」とあります。（この詳細については近々纏めます。エンディング・ノートのサンプルも考えています）

弟にはこの話はしていませんが、彼の生き方は、まさしくアルフォンス・デーケン先生の指摘の通り歩んでいます。

今葬儀は簡素化ではなく簡略化に進んでいると私には思えます。家族葬を否定するわけではありませんが、その人に相応しい召天の姿を、信仰の証となる葬儀が望まれます。そのためには本人が生前にきちんとその内容や趣旨を家族に伝えておく必要があります。私は盛大を勧めているのではなく、宗教儀式として、出来れば参列者に分かりやすい儀式、その人の生きた証が分かる葬儀であるべきだと考えています。

クロアチアの旅については次回とします。次回が多くなって自戒しています。最高にいい旅でした。ボスニア・ヘルツェゴビナのサラエボにも行ってきました。

